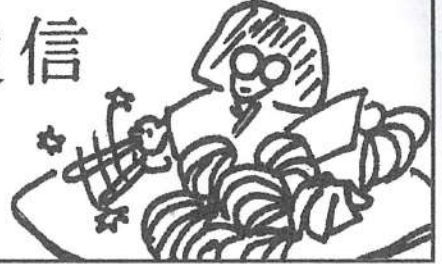


通信

大道芸



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

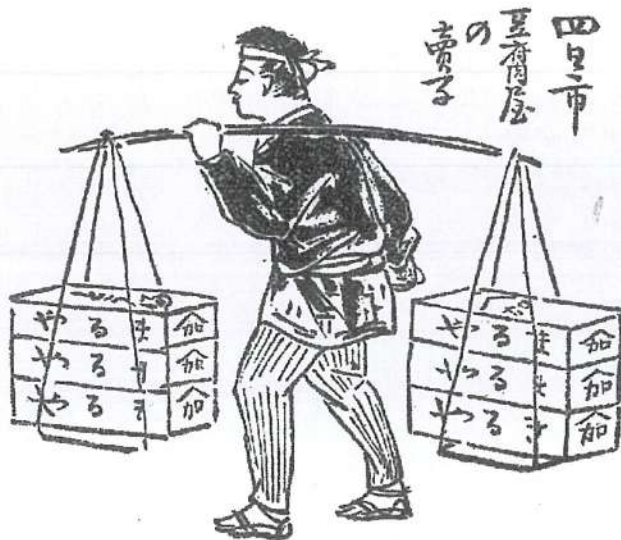
(daidogeikib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

四日市の物売り

近世の物売りは、挿絵や絵画でよく見かけるが、近代に入つての物売りは中々見ない。今年は昭和百年だそうだが、昭和三十年代(一九六四年)頃までの庶民生活は、地域差はあつても、江戸時代とそう変わらんのじやなからうかと思える。今号に取り上げた伊勢(三重)四日市の物売りは、『風像画報 第三三八号』(明治三十八年刊)が載せるものだが、大凡ではあつても姿形が想像できるのはそのためである。

○玉うどん

「玉うどんは、よろしいか、玉蕎麦は要りませんか」と、婦人。天秤棒の両端に長方形の箱(大きき長さ二尺五寸、幅一尺三寸位深さ一寸五六)婦人等は、四日市の西北小



分(五個位宛を担ひ、箱の中に玉うどん又は蕎麦切を入れて売りに来る。其の風俗、髪を手拭に包み着物の裾長く端折りもせず、草履履きな

杉と称する所より来たれり。行かむとす。豌豆煮立が必結梗云、東京に於ける饅ずしも煮立てならねば、此販やかだつたか売りやすかつ純の行商人は、毎夕点灯の茹出しも嘸ぞ冷たかるべたか、『風俗画報 第三五五号』(明治四十年一月号)も再度、四日市の行商人を取り上げてゐる。

○豆腐売

行商人の

服装と呼び声

伊勢四日市

しは茹で出し、うどんはき長方形の箱に入れ、天秤の籠の籠り。即ち方言と棒に荷ひ「揚豆腐、豆腐豆知るべし。肩に天秤、荷腐、揚豆腐」と大声に、判箱は之を釣るに縄を用ゐ然と呼はり行く。豆腐一丁ず、針金を以てせり。品一錢五厘、油揚げは一錢に三〇層買 白立て縞の着物に紺、白又は縞の股引、半股引にを着し、草履又は草鞋を履き肩に天秤棒を荷なひ、両端に伊賀籠と称する竹製の籠を釣り下げたるがあれば、車上に籠又は箱様のものを積みたるもありて、戸毎に「コ服装は剥身売りの如くならあめツ」と大声にて呼ばンチワ、カミグツヤ、ホヤリ、気の利きたる風俗なはりつつ仕合各所を廻る。ノワレヤ、ボッコハナカツタらず。同じ饅餡の稼業な其の服装は縞の筒袖、尻かカイナと門口より呼はり、がら、江戸時代の名残をらげ、紺の股引を着し籠をお払い物を相当の値段に買ひぞとどめたる 彼の鍋焼饅入れたる箱を大なる風呂敷歩くなり。

○力飴売

て皿に返し、箱は復び之を蓋をす。概ね男子なり。「ちからあめーイ ちかみたるもありて、戸毎に「コ服装は剥身売りの如くならあめツ」と大声にて呼ばンチワ、カミグツヤ、ホヤリ、気の利きたる風俗なはりつつ仕合各所を廻る。ノワレヤ、ボッコハナカツタらず。同じ饅餡の稼業な其の服装は縞の筒袖、尻かカイナと門口より呼はり、がら、江戸時代の名残をらげ、紺の股引を着し籠をお払い物を相当の値段に買ひぞとどめたる 彼の鍋焼饅入れたる箱を大なる風呂敷歩くなり。

四日市
豆腐屋
の
物売り

かぬ商ひなり。其の来たヨセン飴及び烏帽子飴の二着物、裾端折、草履ばき、るや長脚の踏台肩に、力種なるが、其の呼び声の異天秤棒の両端に函を釣下げてンテラを携へ、市中を飛なりしゆゑか、頗る売れる 荷ひ「トーフ、ヤキドーフ、アゲドーフ」と呼ぶなり。

の点灯夫と土蔵の羽目よ【註】ギョセン飴Ⅱぎょうり翅伸したる蝙蝠と、茹せん飴のことか？

出饅餡は薄暮軒低き裏町 ぎょうせん飴は、麦芽ともなし。大抵縞の着衣に紺の風靴にて、二者の活発糯米だけを源流として作つ 裾端折、天秤棒の両端に大なる独り独り此の饅餡のみ濁松山市では現在も夏の風物 簞を吊る。簞裡其季節の美れる節の歩調鈍く「うで」として飴行商がいるそうである。売り声は左記の通り。

だし饅餡、ある。売り声は左記の通り。 げて、朝まだき「花ヨ、花ヨ

声は次第に暮暮の裡に薄れ「あめーにぎょうせん」 1、花ヨ」と節面白く、

声は次第に暮暮の裡に薄れ「あめーにぎょうせん」